

宮古島市教育委員会指定学力向上推進研究発表会

2月14日、宮古島市立北小学校の3回目の訪問がなかった。今回は北小学校が宮古市学力向上研究指定校の研究発表会である。5校時の全学級授業公開と研究発表会、村瀬公胤先生の講演会が行われた。私もずうずうしく村瀬先生に同行させてもらい訪問がなかった。(私は子ども達の登校の様子から参観させてもらった)

初めての訪問が4月12日(RシートNo.60)、2回目、10月18日(RシートNo.97)今回が3回目となったが私にとって驚きと感激の訪問であった。・・・何が一番変わったかである。北小のすべての職員の表情の変化である。これに尽きる。メソッドやスキルではない。職員室の中での顔、聞こえる声、ローカですれ違う時に交わされる会釈、明らかに4月当初、10月の訪問の時と先生方の表情が変わってきている。・・・言葉や表情に柔らかさがある。さらに驚きは「すべての教師である。」こと。

佐藤学先生も話されるように「改革は簡単ではない」。北小の先生方の4月当初の不安や疑念がかなり払拭されている。・・・なぜ北小でできた。・・・私が学ぶべきことが北小にいっぱいあることを認識させられた思いであった。当初の不安や疑念は今なら笑顔で話せるのではないだろうか。そんな空気がうかがえる。

職員室も多様な人間の集まりである。それぞれの先生方の個性や考えが認められ支え合う民主主義の集団でなければならない。経験年数や経験値の差異もある、だから難しさがある。先生方の個人の理念や哲学と、学校改革に向けた理念や哲学との折り合いを見つけなければならない。北小は「乗り越えて進もう」というすべての同僚のベクトルが「挑戦」へ向けられたのではないだろうか。さらにこの壁を乗り越えるのに同僚との対話は欠かせない。同僚と同僚をつなく、不安や疑念を共有する、校内で誰かが音頭を取らなければ事は始まらない。・・・いったい誰が、どのように進めたのだろう。(校長のトップダウンがどのように進められたか)

先生方の表情は、そのまま子ども達の表情や仕草、対話に写し出される。子ども達が安心しきって他者へ依存したり、支え合ったりしている。今回は特に低学年の先生方の「柔らかい積極的な挑戦」がひしひしと感ずることができた。算数では協同的な活動が意図的に仕組まれ、学びや支え合いのきっかけをつくり、子ども達が寄り添って課題に向き合っている。5校時には保護者の参観もあったが、「安心」を提供できたのではないだろうか。



朝8時過ぎに学校に伺った。小雨の中一人の地域の方が傘を差しながら、子ども達に挨拶と声をかけている。さらに朝の読書の時間には、地域の方々を読み聞かせを行っていた。「子ども達は楽しそう。地域の方はうれしそう。」つながっていることを実感した。子どもを育てるのはすべての大人の義務である。「学校、家庭、地域の連携」とは？理念やその行為の目的でさらに深くつながりたい。

[研究報告書より]

まずはこれ、報告書2ページの平良校長のあいさつ文を抜粋させていただきます。・・・なんて素敵な校長！

…協同的な学び合いの授業づくりは難しいと考えたり、これまで培ってきた授業スタイルを変えることに躊躇したりする職員がいたことは事実であり、校長自身も同様に迷っていた。

職員のベクトルが一つにならなかったことに対し、最も反省すべきは私校長自身であり校長の確固たるビジョンが欠けていたことである。校長がビジョンを明確に示し、その方向性と方策を具体化することによって、教師一人ひとりが互いに学び合い・高め合っこそ、真の「協同的な学び合い」が可能となることを校長自身が学んでいなかったのである。

あいさつ文です。どう思われます。素直に、謙虚に、真実に向き合い真摯に職員と子ども達の成長を願うトップの言葉ではないでしょうか。私も正直言って研究報告書はめったに読まない者ですが、このあいさつ文を読んで「拜読」させていただくという言葉が思い出された。この校長の下で働ける者達には幸せがある。

学びの共同体の学校創りは「関係づくりである」という。北小の報告書の中にQUTテストの分析がある。子どもの自己肯定感、存在感、満足度、承認度が量られる。テストの分析だけでは意味をなさない、しっかり分析し改善や対策が図られることを期待する。ケアの要する子はおおよそ見当がつく、ぜひ授業の中で承認されたり、支え合う関係からつながりをつくってほしい。基本姿勢は「人は聴いてくれる人にしか心を開かない」。

[授業参観より]

《1・2年生》

今回の訪問の一番の驚きが、低学年の教師たちの変容である。4月、10月には見られなかった、教師たちの何とも言えない柔らかな表情があった。10月までは不安や疑念を抱きながら、どことなく自信なくちょっとうつむきがちな表情をしていたが今回は全くそれが感じられない。ローカですれちがう時も、温かな素敵な会釈で迎えられた。決して大げさでなく、淡々と柔らかな笑顔である。

教室に入るとまたびっくり、ここでも先生方の表情が抜群にいい！子どもの発言にしっかり心が向けられている。柔らかな対話、ゆったりとした仕草、教師に余裕がうかがえるほどである。決して手を抜いているのではなく、余裕があるわけでもないと思うが、そのように見えるのである。教室の整理整頓、ロッカー、掲示物等を見ても、「みんなで」共通実践がうかがえる。特に1年生の教室の後ろの壁の図工の時間の作品だろうか、1組も2組も実に鮮やかな彩である。教師のスキルの共有がなされているのではないだろうか。誰かが特別に持ち得たスキルを仲間と共有するは、最高の教材研究である。

2年生の教室では、算数の授業に協同的な活動が準備された。仲間と協力して箱の形をつくっていく。

「きき合い」「よりそい」「支え合う」写真の子ども達の様子を見てほしい。互いに支え合い分かる喜び（できる喜び）。この学びの快樂をこの子達の未来へつなげたい。

教師のポジショニングやケアの姿やタイミングもなかなか様になってきた。ゆったりとした教師の姿勢が教室を静かにする。



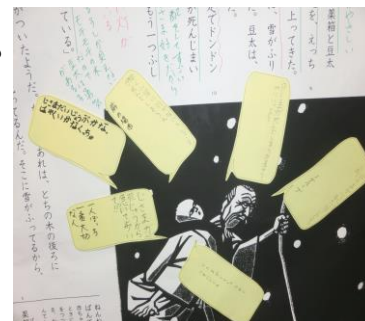
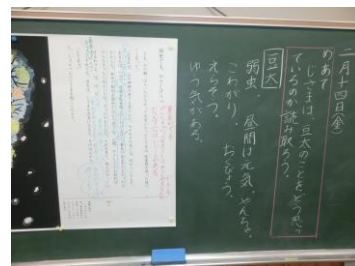
《3年生》モチモチの木（5校時）

文学教材での「学び」への挑戦である。違和感なく大型教科書が活用されていることがうれしい。1組でも2組でも授業者から課題やテーマが下ろされると下の写真の様子である。聴き合うに躊躇がない。

「じさまの思い」「豆太の思い」に迫る。右下写真授業者は、お医者さんの背中ではかせす豆太の気持ちを吹き出しにしてみんなで共有した。1組では、「豆太はなぜ灯りがついたのであることができたのだろう。」グループ内で自分の言葉で語られる。ぼそぼそしっとり聴き合っている。

「こわい」⇔「勇気」は対ではなくて「こわい」は勇気をえるための材料にしたい。3年生誰もが持ち得ている「こわい」を否定したくはない「こわい」＝「弱虫」でもない。

文学は、解釈や分析よりも「文学に親しむ」を大切にしたい。子どもも千差万別、各々の読みや解釈から「学び」が広がり深まる。



この3枚の写真から何がわかりますか？ 写真①、授業開始時の写真です。コの字で机を配置し教師は座っています。写真②、子どもが発言しているところです。写真③、子どもの気づきや考えを大型教科書に書いているところです。さて共通していることは？ 『聴く』ための行為であることです。コの字は聴き合うための形態です。写真②③の授業者の姿勢を見てほしい。「心に向けて聴く」とはまさにこの表情仕草です。



《4年1組》 1月からの臨時の教師である。実にかむしゃらに一生懸命の教師の姿が見えた。



担任の先生が1月から休みとなり、臨時の教師に引き継がれた。第一印象が「かむしゃらに一生懸命である」。突然の臨時と学び合う授業づくり、「えっ…それって何？」不安な心境が手に取るように分かる。

しかしすばらしい！「とにかくやるしかない」割り切った若い教師の一生懸命さが不安を押しきって伝わってくる。焦らず・ゆっくり・無理なく進めてください。授業における学びは前任の担任からしっかり子ども達に引き継がれています。教師は子ども達にテーマや課題をしっかり下ろして、「分からなかったら仲間と聞き合ってね。」ひと言つないであげればよい、後は右下写真④のような風景になる。

「ケアする」グループに下ろしたときになかなか自分から仲間に依存できなく孤立する子が出てくる。孤立した子を仲間に繋ぎ学習への参加を促すことがケアである。

「一人残らずすべて」にこだわってほしい。教師一人での対応には限界がある。だから仲間につなぐのである。仲間は仲間を決して見捨てない。子どもの力を信じて教師も教室の仲間に依存しよう。本日の教師の個への対応はよかったです。できれば教師が解決を手伝うのではなくもっと仲間につなげたい。この教室の仲間達ならきっとできます。



写真④

《4年2組》 算数：ともなって変わる二つの量を式で表そう。



写真⑤

このクラスの子供達の素晴らしいところは写真⑤、『きき合う』である。仲間の視線が発言者に向けられる。聞いてくれる仲間がいるから何でも話せる。発言者は自分の言葉でできるだけ皆に分かりやすく自分の考えを伝える。「分かりたい」と「分かってもらいたい」の思いが繋がる。仲間の関係が良いからできる。



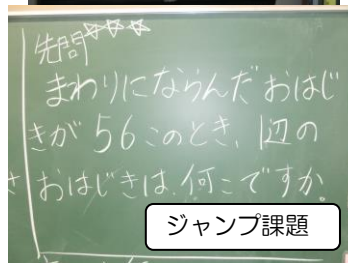
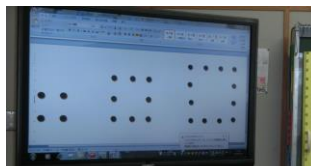
共有問題の確認である。ここでも仲間の表現に視線が向けられる。教師もゆったりとしている。みんな聴き入る。

【ちょっとした工夫】

思考する時間や互いの学び合いに時間を要したために。… 問題文や資料を小さく切ってノートに貼らせる。それだけでかなりの時間短縮になる。さらに表を扱う場合などは教師が黒板に提示したのを見て、考えをノートに記するより、個々に表を配布しじっくり自分のノートの上で思考することができるようにしたい。RシートNo.69 北國小宮城先生、RシートNo.105 稲田小友寄先生の例を参考にしてほしい。

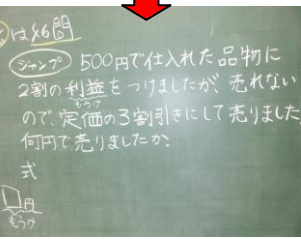
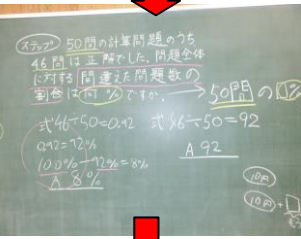
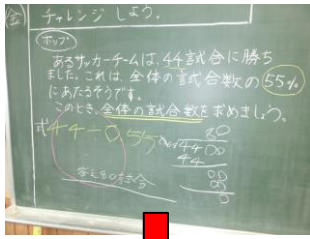
さて、本日の授業で共有の基本問題（教科書レベル）とジャンプ問題が準備されたが、後半時間が無くなってしまった。実にもったいなかった。

右の写真がジャンプ課題であるが「伴って変わる二つの量」の課題としては最高の問題である。授業終了後に、何人もの子ども達が先生に聴きよっていた。それだけ子ども達にとっても難しいけど「やりがい」のある課題であったと思う。それだけに時間の配分計画が惜しまれる。授業のどこに時間を費やしたいか？教師の説明で分からせる時間が大切なのか？子ども達はどの場面を望んでいるだろうか？「もがき・夢中」になるのは・・・



ジャンプ課題

《5年1組》割合のいろんな問題に挑戦しよう。(少人数指導、等質分離) ホップ→ステップ→ジャンプ



ここも、少人数指導の教師は二学期後半からの臨時の教師であるという。本日は臨時の少人数のクラスを受け持つ先生の授業と、担任が指導する授業の両方の授業を見せてもらった。割合の課題で3段階のレベルで問題が準備されていた。

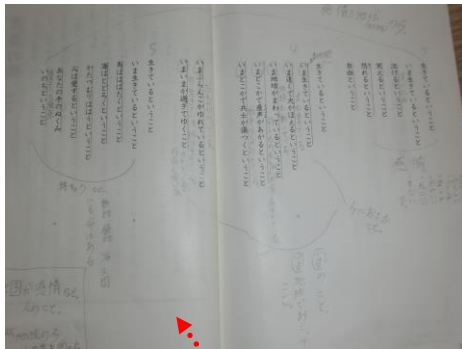
自分のクラスが2つに分けられたとき、担任や子ども達に不安はないだろうか？ しかし本日の2つのクラスは全く同じような学び合いの授業が進行していた。特に年度途中からの臨時の先生は、「どうしよう」「大丈夫かな」不安でいっぱいであったと思う。しかし、授業では2つのクラスとも子ども達が簡単でない問題を夢中になって取り組んでいた。この臨時の先生の不安を取り除いたのはいったい何？ … 同僚性ってなに？ 何で必要なの？ … おそらく5年1組の担任の先生と授業経営等で日常的に会話が交わされているだろうと考える。そうでなければ子どもたちにあんな笑顔が生まれるわけがない。教室は分けられても、周りはいつもの仲間達である。聴けば寄り添ってくれるわたしにとって最高の仲間達である。写真⑤、どちらのクラスも子ども達の「きき合う」はしっかり映し出されていた。聴き入る仲間を支えられる発表者たちである。



《6年1組》国語 詩の教材 「生きる」 谷川俊太郎

谷川俊太郎「生きる」の授業である。まず下の写真を見てほしい！このクラスの仲間達の寄り添い方を。すべてのグループがこのような状況でした。今日だけ。今すぐ。できる行為ではありません。4月からの積み重ねの結果です。分からない言葉にはすぐに辞書が使われる…ここまではふつう。この詩で使われている意味は何？「仲間で訊き合う」仲間の解釈や思いと自分の考えを重ねる。「なんで？」「そうなんだ？」仲間の感性から自己の学びが広がり・深まる。右の写真の教科書の書き込み、下写真の女の子の記録である。グループは3名であったが実に多くを語っていた。

全体の共有ではすべては語れなかったがこの子や、仲間達一人ひとりの思いを大切にしたい。最高の評価材料になるのでは。



《6年2組》授業途中に教室に入ってきた子を笑顔で受け入れる教師。この子なりのつらい状況を受け入れる。分かってあげられる教師に子どもの心が開かれる。

宮古島市立北小のみなさんお疲れさんでした。素晴らしい訪問になり感謝しました。私にとってほんとに「学び」の多い訪問になりました。

特に今回は低学年の先生方に脱帽です。…びっくりでした。素敵な笑顔ほんとにありがとうございました。今後もゆっくり焦らず私たちなりに進みゆけばと思います。感謝します。

さて、右写真校門をいってすぐ石に刻まれた「大志」の文字。素敵な言葉です。北小のどの先生でも「大志」について語れるといいですね。

この子供達を待ち受ける未来はどうなっているんだろう。未来は今の学校にどんな子どもを育成を期待しているのだろう。…OECDの提言はなに？…学校の目的、教師の役割は？

